

自分の一番よく知つて居る人

英米の有名な小説やストリーヤスケッチの中には、子供を中心にしたり或は一部分の材料として使つてあるのが澤山ある。子供といふものを主眼として、どの本にどのやうに子供が書き表はされてゐるかを拾ひ集めて見るのも面白いし、又その子供のしたことな心理的に研究したり、我國の子供と比較研究をしたりするのは、更に興ある仕事と考へられる。茲には専ら材料の一端を紹介する目的で有名な書物の中にある子供の事を大略述べるので、その手始めとして題の如き書物を撰むのである。

東京女子高等師範學校教授 岡田みつ

「自分の一番よく知つて居る人」(The one I know the best of all)といふ書物の作者は有名な小公子やセーラ・クロー(Sarah Crew)等の、子供を主題にしたる話を書いたバーネット(Mrs. I. H. Burnett)夫人である。この本も、やはり子供を題として書いたものであるが、子供の心裡に、人生のバナラマが如何いふ風に映するかを、いつくかの小品文に書いたので、その子供といふのが想像的の子供でなく、夫人自身が、幼時に世間の事物に觸れた時

の印象を記したものである。従つて自傳めいてはゐるが、又單に子供が初めて書物を持つた時とか、死といふものに出遇つた時とかの感じと見てもよいのである。一體子供の心には思想が澤山あるに相違ないが、子供の言語が其を言ひ表はすに十分であるのと、又子供がそれを思ひ切つて發表しやうとの勇氣を缺いてゐる爲に、外部から大人が如何に興味を以て觀察しても、よく知り難いのであるのを、作者が過去の自分即自分の一番よく知

つてゐる人を材料として書いたのであるから、讀む人も自分の經驗に照らして、眞に左様であると合點せらるゝ處が多いわけである。下に興味ある個所を三四拔出して、内容を御紹介することゝする。

一、子供の理屈。

小さい人（書中に主人公たる子供の事を小さい人としてある）が或時赤ン坊を抱きたくなつたと見え、乳母にその旨を告げた。（乳母といふのが名もなければどういふ人柄の人といふ念も無い唯乳母なのであつた）。併し小さい人の心中には、三歳にもならぬ人には赤ン坊に安心して抱かせては呉れぬ者との念は確かであつたと思ふ。小さい人は自分の思想を如何に言ひ表はしたかは分らぬが、下の如き意味の問答をしたものらしい。

「御膝に赤チャンを抱かせて頂戴。」

「未だ御小さいから」と乳母が云ふ。

「少さくないよ。赤チャンは小さいが、私は此腰掛けの上で大事に抱ッこするよ。」

「赤チャンが迂り落ちますといけませんぬ。」

「乳母のする通りに両手で抱くから、赤チャンを貸して御くれ。」と小さい人は膝を擴げて待ち受けた。此問答がどれ程續いたか分らぬが乳母が性質のよい女なので、腰掛けの傍に膝を折つて白い着物を衣てゐる赤ン坊をソツト小さい人の膝に載せて小さい腕に抱へさせるやうにして、實は乳母が聡りと抱いてゐるのであつた。

「ソレ赤チャンが御膝に載りましたよ。」と云つて乳母はよいつもりであるが、實は乳母は大に誤つてゐたので、

「デモ私が抱きたいの。」と小さい人が云ふと、

「抱いていらつしやいますよ。」とニコ／＼して、

「マー成人の方のやうに赤さんを御抱きになつて、大きな御嬢様ですこと。」と乳母が云ふ。小さい人

は眞面目に、飾らず僞らさず。

「抱いてはしないよ。乳母が抱いてゐる」と云つた。で、結局小さい人は赤ん坊を抱きもせず、抱いたと思はせられもせずに濟んでしまつた。而して其時小さい人の心中にはかういふ順序に思想が経過したのである。私は幼いもの故、實際は乳母が赤ん坊を抱いてゐて、而して乳母は私が抱いてはせぬといふ事が私には分らぬと思つてゐる。併し私には分つてゐる。私は小さく、乳母は大きいから赤ん坊は常に乳母が抱くのを知つてゐる。私がその知つてゐるといふ事を乳母に解らせる事は出来ないから、仕方がない。私は赤ん坊を抱きたいが乳母は落すといけないとて懸念する。私は落しはせぬと思ふ。乳母は大人で私は子供である、大人と云ふものは勝手な事をするものである。といふやうなのであつたが、大人の不當の仕打について反抗するやうな念は小さい人の頭脳には無かつ

た。兎に角、大人は、好き勝手な事をするが、大人の無限の力に對して是非を争ふ道はないといふ事を、十分に認識してゐたのは確かである。

二、社交上の難問題。

御隣りの奥さんが訪問に来て御出で、小さい人にこんど生れた赤ん坊の事を尋ねられた。其時に小さい人は初めて社交上の困難、即事實と禮儀とを如何に調和させやうかとの大難題に接して、大に困却した。

「赤さんの御名は何といふの。」と奥さんが尋ねた。「イデス」と小さい人は答へた。

よい御名ですこと！小母さんの宅にも赤チャンがありまして、エリノアといふ名を付けました

いゝ名でせう。

如何にも簡單な事のやうであるが、之がその大問題なので、如何なる譯か、小さい人はエリノアといふのは良き名と思はれない。心の奥の奥まで

探して見ても、良い名と思はれない。それがその無情ない所以なので、御隣りの小母さんは自分の母さんの友達で、親切な善い小母さんなのに、何といふ不幸か、その赤さんに厭な名を付けた。マア何として、失禮にも冷酷にも、ありの儘を云はれやう、情けなくて堪らなくて、氣の毒な小母さんを黙然と困却つたやうに見てゐると、小母さんは小さい人が恥かむでゐると思つたか、又年がゆかぬので分らなくて返事が出来ぬと思つたらしい。が、それは大間違ひで、小さい人は社交上の問題と闘つてゐて、何とか結末を付けねばならぬと焦心つてゐたのである。

「良い名でせう、御好きでせう。と小母さんは頻りに優しくいつた。小さい人は、切なげな眼で小母さんを見てゐた。心に信ずればとて、不快の事を言ふことも出来ず、さればとて思ひもせぬことを言ふわけにはゆかず、終に中を取つてどちらつ

かすに、

「アノー……アノー……イデスといふ程……良くは……ない。」と云つた。大人の連中はドツと笑つて、小さい人の頭を撫でたり何かして可愛がつたが、誰一人この子供が思考してゐたと思ふものは無かつた。

三、巡査の戯言。

公園に草地があつて、其處の立札に、墨黒くと「この上を歩むべからず。犯すものは告發せらるべし」としてあつた。公園内の巡査が威厳しく巡回するのは、犯す者を捕へる爲であると聞いて、小さい人は萬一どういふ事があつて自分が禁を犯して捕へられたらばどうしやうと思つては、身の毛も彌立つやうに感じてゐた。處ろ、或日の事四歳の小さい人は、恐ろしい巡査と打並んで草地の傍の共同ベンチに坐つてゐた、乳母と巡査とが馴染になつてゐたので、乳母が小さい人を巡査

に托して一寸何處ぞへ行つたものと見える。小さい人はベンチに足を前に投げ出して坐つてゐた。

而してベンチの後ろの横木は高くして小さい人の頭はそれには達せぬのであつた。それで不圖草の上に落ちばせぬかとの恐怖心が出、それが嵩じて、その恐い巡査に質問する氣になつた。幾度もくち口を明いて尋ねかけて、ヤツとの事で、

「此草の上を歩くと、あなたその人を捕へるのですか。」

「ア、捕へますよ」と巡査は、小さい人の問を興ある事位に思つたのである。

「草の上を歩けば、誰でもあなた捕へなければならぬの。」

「そうです。誰でも」と職務的の口調で、巡査は云ふ。

「もし私がしても? と小さい人は息を喘まして哀を乞ふやうに尋ねた。

「そうです。牢へあなたを入れなければならぬ。」
「でも」と口籠りながら、「もし態とでなく……そうなつたら?」

「ヤツぱり牢へ入れるのです。知らないで爲るな」といふ事はないから。」

小さい人は、後ろを振り向いてベンチを見た。横木は高く支へにはならぬ。

「でも……でも……私こんなに小さいから、ベンチの背後から落ちるかも知れない。草の上に落ちても牢へ入れるの?」

「そうです。抱き上げて直ぐ牢へ連れて行く。小さい人は顔色を變へたに相違ないが、無言で坐つてゐた。その時聲を上げて泣き出さなかつたのは、その頃から品位を保つとか覺悟を決めるとかいふ念の基礎的觀念があつたと思はれる。併しこの一事件は眞から恐ろしい事であつたので、夜中に目を覺して、床の中で慄へた位である。」

四、始めて悪い事をした時。

或る日、小さい人が、エマといふ御友達と遊んで居た處が、如何なる加減か急に儼くなつて來たので、

「ママ御腹が減つた！もし五厘あればあなたに頼んで、御菓子を一持つて來てもらふけれど。」

と小さい人は云つた（エマの母親は飲料や菓子の小店を出してゐたので）此時どうして乳母が傍に居なかつたか、又何故宅へ歸つてバンでももらはなかつたのかは分らぬが、エマは商賣の事は、見聞きしてゐて大膽なので、

「御菓子を掛けて買へばいゝ。うちの母さんはあなたへなら貸すから。」

と云ふ、小さい人はそのやうな思ひ切つた事は夢想だにもしないので、驚ろいて息を喘ませてゐるとエマは、

「構はないワ。御菓子をもらつて置いて此次御金

の出來た時に拂へばいゝ、左様する人澤山あるヨ、母さんの處へいつてもらつて來て上げませう。」

何といふ大膽な、危険な、不都合な目算だらう！若し御金が手に入らなかつたらば、家名を汚すことになる！と思つて、小さい人は、

「うちの母様は御怒りになるの。そのやうな事をさせては下さらない。」

「それなら話さないで置けばいゝ」とエマは平氣でゐる。而してエマの此平氣な當然なといふ態度が、小さい人の心を動かしたものと見え、とう／＼御菓子をもらつたのである。が、物事を誇大して考へるが子供の通性故、子供部屋の規定を破つたのは、子供心には大罪を犯した事になるので、小さい人は、一口御菓子を口に入ればしたが、その餘はどうしても食べられなくなつた。さりとて、小さい齒形の付いた半圓に食ひ取つてある菓子を

返戻もどすことも出来できず、この苦悶くもんと屈辱くつじやくとを打明うちあけて話はなす人もない、而してその一片ぺんの御菓子おかしの跡始末あとしまつをするに殺人者さつじんしゃが根跡こんせきを残のこすまじと苦心くしんするのと同じ程ほどの心遣こころづかひをして、食堂しょくどうの戸棚とだなの中へ納めたその後のち、夜よるとなく晝ひるとなく、良心りやうしんの呵責かしてくが続いて自分じぶんには幾年いくねんかの間の苦腦あひだくなうの如ごとくに感かんぜられたが實際じつざいは二三日にちの事であつたのであろう。而してその苦しい所ところは、母親ははおやに叱しかられる恐れおそではなく、道德だうてく的てきの苦痛くつうなので、母かあさんは貴婦人レディであるのにその娘むすめの自分じぶんは借かり買かひをして、家名かめいに傷きずをつげた。その罰ばつとして、假令たとへ雷らいが落ちて自分じぶんはこの儘死まじしんでも誰たれを怨うらむことも出来できないと思おもつた。この心痛しんどうがもつと續つづいたらば、小さい人ひとは、戸棚とだなの御菓子おかしと共に、溶とけて崩くづれて滅亡めつぼうし去いつたかも知れないが、煩悶はんもんの極きま、二つ年長ねんちやうの兄あにさんに打明うちあけた。どういふ場合ばあひにどういふ風ふうに話はなしたか記憶ききはないが兄あにさんは宏量かうりやうの男兒だんじで、しかも御小遣おこづ銭かみを持つて

ゐる資産家しさんかなので、菓子屋かしやへいつて借銭しやくせんを拂はらつて来てくれた。その時の兄あにさんの偉えいくて有難ありがたかつた事こと！並なみの人間にんげんではなくて、御話おはなしの中うちに出て来る偉えい大だいの英雄えいゆうとしか思おもはれなかつた。之これが六歳さいの時の事ことであつた。

五、欺あざむかれた事こと。

小さい人が七歳さいの時ときで、或る夏なつの夕方ゆふがた、御友達おともだちと二人家ふたりいえの近くちかの四ッ角かどの邊あたりをブラ／＼歩あるいてゐると、年寄としよつた上品じやうひんな婦人ふじんが、何か抱いだいて此方こなた彼方あなと運動うんどうをしてゐる。行き違ちがひ様さまに見みると、抱いだかれてゐるのは、生うまれたの赤あか坊ぼうであつた。小さい人は赤あか坊ぼう狂きやうで、近所きんじよに赤あか坊ぼうの生うまれた家いえがあると、態々わざ／＼尋ねていつて見みせてもらふ程ほどの熱心ねつしんなのであるから、此際このさいも、その顔かほが見みたくて、行ゆきつ戻りつして友達ともだちと二人ふたりでその婦人ふじんに物言ものいひたげにして居ゐた。すると婦人ふじん（多分たぶんは乳母うはであつたらう）もニコ／＼して「御覽ごらんになりたいの」と言

つてくれたので、之に勇氣を得て、「エーどうぞ」といふと白いレーズの顔被を上げて、赤ん坊の顔を見せて呉れた。

「赤さん御好きですか」とその婦人が尋ねた。

「何よりも大好き。」

「御人形よりも？」

「もう／＼何百倍も。」

「でも御人形の方が泣きませんよ。」

「私なら赤さんを大事にしますから、泣きませんよ。」

「よ。」

「あなた赤さんが欲しう御坐んすか？」

「エーもう赤さんが、もらへるなら私何でも上げます。」

この時、小さい人と御友達とは、婦人を中央に挟んで歩いてゐた。それ丈でも赤ん坊と多少の連絡が出来たやうに思はれた。

「この子をもらひたいと思ひますか」と婦人は眞

顔でいふ。

「下さるの！まさか！

「上げてもいいのです。よく大切にしてください」

「エー！」嬉しくもあり、疑はしくもあるので、

「その赤チャンの母さんが、御許しにならないでせう。」

「下さるでせうよ」と一寸考へて落付き拂つて、

「澤山赤さんがあるのですから。」

小さい人は息を深く吸入れた。赤ん坊があり餘る

もしさうだつたら、嘸よかろうと思つたが、心密

に、この婦人を疑はぬ譯には行かなかつた。

「あなた私に戯つてゐるのでせう？」

「イーエちつとも。赤ん坊が澤山あると厄介です

もの、若し此子を上げたならば如何なさる？」

「毎朝身體を洗つてやつてねと」小さい人の口か

らは、言葉が轉び出て来る。赤ん坊の世話が良く出来ると思ひて貰ひたくて、「御風呂に入れて、大

きな柔かい石鹸で洗つて……粉をはたいて……着物を着せたり脱かせたり寝させたり……御部屋の中を抱いて歩いたり……膝の上で歩かせたり……而して乳を飲ませるの。」

「牛乳が澤山要りますよ。」

「いゝの、牛乳屋から母さんに取つて頂くから。」

「母様はキットそうして下さるでせう、左様すれば欲しいだけ飲ませて、私と一所に寝させて、玩具を買つて——」

「ほんにあなたよく御存知ですネ。それでは差し上げませう」と云ふ。

「この御子の母様が手放して？眞實に？」

「エーこの御子の母様は、御手放しなさいますとも、ですが今夜は連れて歸つて、あなたが欲しいと仰つたから、若上げる御約束をしましたと

御話して、而して明晩上げますよ。」

翌日の夕方正七時十五分に二人はある町の角で、

その婦人に遇つて、其處で子供と、着物の包みを受取る事に約束が出来た。

子供の心中には、大人に對する崇敬と信頼とが勢力を占めてゐるので、その智あり力あり威ある大人が虚言を吐くなど、云ふ事は、到底信じ得べからざる事で、小さい人はこの上品な年寄つた婦人の言を疑ふは、神を瀆すよりも悪い事と考へた。翌日一日は課業も手に付かず夢中で暮らした、母様は、それは戯言だからと仰つても、小さい人は、その婦人が眞顔で笑ひもせなかつたし、戯れですかと問ふたらば、然らずと答へたし、赤ん坊の親が困りはせぬかと念を推しても、あり餘る程に赤ん坊がある故構はぬと言ひましたとて、聞き入れなかつた。

さてその時刻が近づいて、二人は約束の場所へいつて、その邊りをぶら／＼歩いて待つてゐた。十分毎に相談をしてどつちかが勇氣を鼓して、通

り掛りの人に時間を問ふた。約束の七時十五分になつたが、婦人は見えない。

「赤ン坊が寐てゐるのかも知れない。目の覺める迄待つてゐるのでせう。」

又二人は歩き出した、心持ちでは何時間も、何ヶ月も、何年も歩いた氣がしたが、寺の時計が鳴つたのを、二人が數へると八時である！顔を見合せ二人は。

「來ないのでせうか。」

「でも來るといひましたよ。若し來なければ虚言をいつたのネ！」

とはいへ、虚言を吐いたなど、假に思ふだけでも失禮である。まさかその様のことのある筈がない自分達が何か時刻とか町の角とかを間違へたのであの年寄りの悪意とはしたくない。

又二人は歩いた。話し合つた、見守つた、やがて八時半となつて、もう床に入る時間をさへ過し

たので、この上待つわけにはゆかず、二人は歩を停めて、

「とうとう來なかつた。」

「來るといつたのに。」

「私たちが横町を間違へたのでせうよ。」

「さもなければ、赤ン坊の母様が、否だと仰つたのでせう。可愛らしい子ですもの。」

「而してあの人が言ひにくるのが厭なのでせう。」

「いつか又遇ふかも知れないのネ。」

「さうネ。では歸りませう。」

正直な二人は、婦人が欺いたとは思はないで、毎夕四ツ角を歩いては待つてゐたが、その赤ン坊も其婦人も二度と出て來なかつた、斯の如くにまぎ／＼と信じ切つて、奇麗に驅される人といふては樂園から此の世に來て間のない子供といふ者の外にはない。